

## (1) ICT への取り組み

四万十市立中筋小学校  
宮川 史佳 安田 政司

### 【ICT への本校の取り組み】

本校の ICT への取り組みは、研究主題に ICT の活用を副題として掲げて 3 年目を迎えている。今年度も研究主題「自ら学びとる授業づくり～ICT の効果的活用を通して～」と題して取り組みを進めてきた。その取り組みの柱として次のようなことを考え、研修を進めてきた。

### ○子どもたちのために・教え合う

以前、研修で訪問させていただいた先進校の先生に「どうして、そんなに活用できるのですか？」と質問したところ、「ICT の活用は、目の前にいる子ども達にとって必要なことなので頑張っている。」「活用できる先生とコミュニケーションを必要に応じて取り、教えてもらっている。」という答えをいただいた。その考え方を参考にして本校では、「子どもたちのために」「教え合う」ことを根本に置いて職員研修を進めてきた。

### ○同じような取り組みを進めていくために

多少なりとも職員の構成が毎年変わる中で、同じように取り組むを行うことは難しい。そのために何が重要かということを考えて、校内研等で研修を実施している。子どもの為とは言え新しいこと（ICT の活用）への挑戦は簡単なものではなく、さらに年齢を重ねるとそのハードルはより高くなり、児童に活用させることが疎かになりがちである。3 年目を迎え、市内の他校と情報交換をする中で、より強く感じたことは若年層の先生方の ICT 活用の進化は凄まじく、より活用の幅、質は向上しているということである。そんな中、本校では職員で取り組みを行う際に確認することが「できる」である。「誰もができる」をより意識して取り組みを進めている。

#### ① アプリの使い方を確認できるように

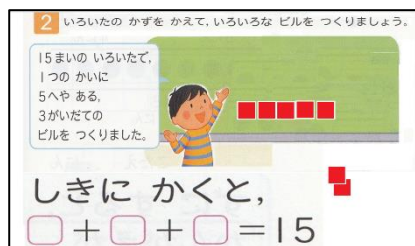
「Classroom」の設定やそこでのファイルの提示の仕方等、様々な必要なアプリの活用方法を「スライド」で作成し、それを共有ドライブにおいて閲覧できるようにしている。



【ICT→方法（使い方あれこれ）】

#### ② バディを組んで

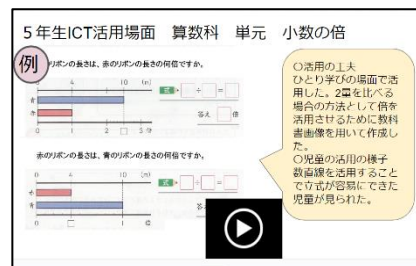
今年度は、職員の構成の変化に対応するためにバディを組んで「教え合う」ことを実施している。そのために相談する曜日を決めて取り組んでいる。それだけに限らず、日頃からコミュニケーションをとることを意識して情報交換を行ってきた。教材研究をする中、だれもがこういうものを児童に使わせたいという考えを持っているものである。そのアイデアを ICT で活用するために話し合いながら、摺合せをして教材を作成していく。そうすることで、方法を知ることができる、活用の幅が広がるという互いにメリットが生まれてくる。



【1年算数教材ビルをつくらう】

### ③ 「できる」を確認して取り組みを進める

学期ごとに「やってみよう週間」を設定してICTの活用に取り組んでいる。その取り組みの提案時には、だれもが取り組める、つまり「できる」ことを校内研で確認してから実施するようにしている。また、その取り組みを共有する際の提案の仕方話し合い、例を提示することで更に取り組みのハードルを下げ「できる」を共通認識したうえでやってきた。



【1学期やってみよう共有場面】

### ○共有から生まれたものをみんなで活用する

取り組みの共有を職員間で行うことで、本校では、共通して活用するものが生まれている。例えば、リーダー学習を行う場面で児童に提示する「メニューボード」(Classroom→課題の詳細)、児童に授業のふり返りを記入させる「ふり返り表」(スプレッドシート)などがある。共有することで、使ってみよう、やってみよう、自分にも活用できると前向きに取り組んでいくことができる、共有から生まれた産物である。それは、活用の仕方が進化をしていくこともある。以前、児童のふり返りをスライドに記入させていたが、児童間のトラブルが多いため、個人にシートを振り分けられるスプレッドシートに変更することでスムーズに児童はふり返りを記入できるようになった。これも職員間での共有のおかげである。

### 【今後の取り組みを考える】

#### ○「できる」の継続

今後、取り組みを進める中で、継続していかなければならないものは、やはり、「できる」である。みんなができることを確認しながらICTの活用は進めていく必要がある。そのためには、バディを組むこと、職員会や校内研において定期的に共有の時間を設けることは、継続して実施し「誰でもできる」を根本において取り組んでいかななくてはならない。そこで、考えなくてはならないのは、「できるは人により異なるもの」ということである。「できる人」の考えるものは、実施するにはハードルが高くなり、説明を聞いても理解できない場合がある。特にICTの場合は、取り組みの実施方法を丁寧に示すなど「誰でもできる」ことを意識した取り組みを行う必要がある。

#### ○変わるものへの対応

来年度から教科書が変わる。本校は、算数科でデジタル教科書に代わるものとして教科書をスキャンしたものを学年ごとに作成している。来年度も同じように行うのであれば、教科書の変更に伴い作成する必要がある。また、現在使用しているアプリが使用できなくなった場合、新しいアプリの使用の仕方について研修を実施するなど変わるものへの対応を考えなくてはならない。

#### ○検証の実施

共有では、検証の意味合いを持ったものも実施していく必要がある。例えば、全学級が活用している学期ごとの朝マラソンカード(スプレッドシート)などは、学級全体の周回数が確認できるようになっているが、誰もが確認できる、児童の意欲に繋がるために掲示するなど、あくまでも負担にならない形での検証を実施し、ICTの活用の研究を進めていくことが必要である。